



「志」と言うべきであろうか。自分の意志と周りの環境がピタッと一致した時、男には迷いがなくなる。そして自分の言葉を獲得する。勢い雄弁にもなる。初めて会った桐明孝治はそんな男だった。現在28才。KIDSというバンドのリーダーである。

彼は3年前まで博多にいた。彼の率いていた同名のバンドは、数年間福岡では人気No.1の座にあった。しかし彼は86年にバンドを解散し、上京する。そして今再び以前と同じようにギターを持ち、3人組でバンドをやっている。これまでの経歴を挙げていくというところがあるだろうが、ここでは省かせてもらう。僕の目の前にいる桐明孝治は、強い意志に支えられたあるエネルギーを発散させている。「良いものであれば、みんなが良いと言うのは当たり前なんです。それが僕のポリシーだから、今、何処に出ても誤解されないという自信はありますよ。だって、絶対良いものを作っていると思うから」

以上の発言の通りまったく迷いが無い。話を聴き進むうちに、この強固な意志の底に見えるのは「志」なのだと理解した。

利用出来るものは利用する

●KIDSというバンドの名前がシーンに再び出て来たのはイカ天（イカスバンド天国の略。本来は東京ローカルのTV番組。一口で言えばアマチュアバンド勝ち抜き合戦なのだが、これが「平成名物テレビ」の1コーナーとして以上の反響を全国に轟かせ、深夜の超有名番組になっている。先日福岡でも放送が始まった）に出演した事が大きいと思うんですけど、その事をどう捉えていますか？

僕等の場合利用出来るものは絶対利用しなきゃ駄目だ、という事ですね。東京に出て来て今の形でやりだすまでにブランクがあった。ライブハウスに出ようと思っても、20枚のチケット・ノルマをやっと果たすか果たせない、という所だったんですよ。もしそれが果たせない、次にライブが出来ない。そんな状況をまず打開しなければいけなかったんですよ。そんな時に始まったのがあの番組で、じゃあ利用させて貰おうと。

●3人組になったのは？

福岡に居た時と同じスタイルで、なおかつクオリティーを高めたい形であろうというのがあったから、それを昔のKIDSを知っている人達に知らせたかった。つまり、KIDSは東京でやってますよ、という告知がしたかったんですよ。

●じゃあスナリ出られた？

いや、あの種の賭だったね。だってあの番組はイロモノの番組でしょ？だから本気のバンドが誤解される可能性があるんですよ。あれだけウケ狙いのバンドが沢山出ていると僕等が本気のロックンロールをやったって、「あの人達何きばっているの？」「そんなの今流行じゃないよ」と軽く言ってしまう所があるよね、あの番組って。だから覚悟の上で出たんですよ。

●でも、肩ひじ張った感じには見えなかったけど…

メンバーと顔つき合わせて色々作戦を考えたんですよ。で、エラそうにしちゃ駄目だと。

THE KIDS

俺達素人の番組に出るんだ、素人歌合戦の素人なんだ、と自分に言いさかせたね。だからあの時は本気でやったもん。今こいつ等と一緒に土俵にいるんだ、って。

この試みは今の所成功したと言える。その証拠に、以前と比べて観客の数は明らかに増加し、一緒にやろうというプロダクションの人間が現れ、メジャー・デビューの話まで持ちかけられるようになったからである。しかし、桐明にとっては「メディアは利用しても利用されるな」という事に尽きるようだ。現に宝島誌上で「イカ天脱会宣言」なるものをブチ上げている。

「イカ天の人達はKIDSはおいしい所だけを持っていったと思っているけど、当然ですよ。僕等は自分の身を守る為だったらそんな事気にしない」(桐明)

ロックをやる意味

福岡を出る前、そして上京後桐明は「ギターが好きで、ジャズ・ギターのコードをいじっているうちに病みつきになって」一時的にジャズに凝っていた時期があったようだ。

そして彼は5人編成のジャズ・バンドを組む。その頃出会ったのが現在のベースとドラムという訳だ。しかし、この時代は桐明にとって満足のいくものではなかった。彼に言わせれば「楽曲はそれなりに満足のいくものだったけど、どうも歯がゆい。なんか欲求不満が溜ってくる」という事だったらしい。そして何時の間にかメンバーは5人から3人へ、そしてジャズからロックへと再び戻っていった。

彼にとってロックを演る事はどういう意味を持っているのだろうか。

●何故ジャズからロックに戻ったの？

取り敢えず欲求不満を解消したかったんですよ。で、昔の曲をやったら凄くスッキリしたんです。気持ち良かったんですね。それがロックを演るようになった第一の理由。もう一つはブルー・ハーツが売れた事でしょね。まだ日本も捨てたもんじゃない、と思いましたがね。

●こんな奴が出てきたか、という感じ？

いや、こんな奴を聴く奴が出て来たか、という事ですね。KIDSの昔の曲でHiToHaTaという曲があるんですよ。これは「昔の人は開拓するものがあるって、それを開拓したと言ってエ

お互い貪欲だった

テレビで久し振りに見たKIDSは確かにクオリティが高かった。それは桐明自身の力量に負う所も大きい、他の二人のメンバーによる所も大きいようだ。そこで桐明に2人のパートナーについて語って貰った。

●どういきっかけで知り合ったんですか？

ベースの栗田は単なる知り合いの知り合い。たまたま僕等が演奏しているのを見て「カッコイじゃん」。次に僕が彼がやっているのを見て「ナイス!!悪いけど一緒にやらせて貰うよ」という訳です。ドラムの西川は友達の友達だった。音楽的には西川はブライアン・アダムスみたいなアメリカン・ロックが好きで、栗田はもうジャズ。そして僕がブリティッシュ・ロックが好きという具合に、それぞれ好きな音楽が全然違うんです。だから、最初はうまくいかなかった。何かやると「えっ?」と顔を見合わせるみたいな。でもそんなエゴを持ちつつなんでもうまくいったかといえば、貪欲だったからですね、お互い。

●相手のものを吸収してやろうと。

そう。技術的な事でもそれは言える。事実僕もギターがうまくなったからね。でもテクニックとは違う部分で自分はそれ以上に良いものを持っていると思ったから、自分も彼等に良いものを見せたもん。気に入られようとして。ボーカルはカッコイイよ、ギターはカッコイイよって。それと楽曲聴かせてね、話すんですよ。俺は日本のロックに満足していないよ、という事から始まって、俺はこんな武器を持っているんだ、って事を一昼夜かけて話した。僕だって彼等二人の武器を見せて貰った訳だから。

●具体的にどんな所が貪欲だったんですか？

例えば栗田の場合、以前はベースを胸の辺りまで持ち上げていたのを下に下げたもんね。5人メンバーだった時に福岡までツアーした事があって、その時僕が背負っていた博多のビートに触れた事が原因かもしれないけど、何も言っていないのにそれまで指で弾いていたのをピックに代えたんだ。そこに彼の貪欲さを見たような気がする。



パっているけど、俺達はお前等が捨てていった残りカスしか扱わされてないで、それを受け継いでいくしかない。フロンティアなんてもう何処にもないんだ」という内容なんです。今でもそういう気持ちでやっているんだけど、随分前、それこそバンドを始めた頃に作った歌なんです、これは絶対ベスト10には入らない曲だと思っていたんですよ。でも、今だったら入るかもしれない。それだけみんなが押し着せの歌謡曲には満足していない、という感じがあるんですよ。

それともう一つ、今バンド・ブームという事でロックから外れたものがロックンロールになっている。それを見て「悪いけどいっちょやらせて貰うよ」みたいな感じ。正直言ってそんな所もある。まあ結局は先祖帰りというか、今自分をベストに表現出来るのはロックンロールしかないと感じたんです。

●昔も今も3人組という面では同じですが、何か変わった所はありますか？

福岡でやっていた頃は、ただ何となくやっていたと思う。カッコイイからという、ある種純粋な動機で。でも、東京はロックンロールをやるといっては裏付けがあるんですよ。自分でロックやる事の意味が

●それはどんな事だろう？

一言で言えばJohn LennonのImagineですよ。僕はあれに凄く意味を見つけたんです。こういう歌は流行歌じゃなくて、ずっと引き継がれていくと思う。これが僕にとってのロックなんですよ。そういう意味で僕のロックは他と違う。

●自分の歌を残したい？

残らなかったら駄目ですよ。僕の負け。

●それはイカ天で歌った「1954年の彼に」みたいな歌って事？

あれは明日にはゼロ戦に乗り込む特攻前夜の彼に向けて歌っているんですよ。「俺達は我慢する為に生まれてきたんじゃない」とね。この歌で言いたいのはそれだけ。そうやって歌にしていけないと自分自身がそれを忘れてしまうんです。ハッと気がついたら、我慢する為に生きてきたような行動を取るんですよ。だから「そうじゃないぞ、桐明」って自分自身に言い聞かせているんですよ。僕の歌はみんなそうなんです。

●どうして歌うようになったんですか？

なんで僕が歌い始めたかというと、子供の頃から自分が何故生まれてきたか解らなかつたからです。だから何の為に生まれ、何の為に死んでいくかをずっと知りたと思って生きてきて、それを確かめる為に歌を歌ってきたんですよ。歌にはその時々結論があるんです。



大博多ホール(MAY 4, 1985) PHOTO by RWASA

多くの人に聴いて貰えるスタンスを

桐明自身語っている様に、彼の歌はあくまで自分自身に向けられたものようだ。しかも、それが人々の記憶に残る歌になる事を望んでいる。自分の為に歌う事とそれを時代に刻印する事は本来矛盾している。しかし、自分が作った歌が他者に迎合する事なく、全ての人にアピール出来る筈だという確信を桐明は持っている。だとしたら、彼がやるべき事はただ一つだろう。

●これからどうしたら良いと思いますか？

とにかく一人でも多くの人に聴いて貰いたい。認めて貰いたいというんじゃなくて、聴いて貰いたい。ただそれだけです。昔Rich Kidsというバンドがいましたよね。あのRichは音楽的にRichでありたい、という事だと思うんです。マイナーでもいい、マスターベーションでもいい、というのはPoorですよ。だから今日指しているのは、多くの人に聴い

THE KIDS



大博多ホール(MAY 4, 1986) PHOTO by IWASA

て貰えるスタンスを作る事なんです。それが僕等にとってのRichなんです。だから、何が今自分にとってのI Wantかと聞かれれば、世界中の人に聴いて貰いたいという事ですね。

KIDSがイカ天に出演した時、僕の様にブラウン管を通して見た者も含めて会場にいた他のバンドの面々、それに審査員の人間まである種のインパクトを与えた。審査員の伊藤銀次には「こんなバンドが見たかった」とまで言わしめた。この番組を見た事のある人なら解るだろうが、イカ天は審査員が出場するバンドに何だかんだ言いたい放題に批評する事が番組の一つの見モノになっていて、出る側もともすればウケ狙いに徹しているきらいがある。そんな雰囲気を一掃したのがKIDSの演奏だった。誰もが真顔になってしまった。また、そうさせる力があつたと思う。

桐明の作った歌も輝っていたし、演奏の技術的な面でも言う所がなかった。

「柔よく剛を制す、と言うでしょ。でも、剛が柔を兼ね備えたら有無を言わさないよね。僕等もロックだから下手でも良い、というんじゃなくて有無を言わさない技術も身につけたい」と、桐明が言う通りである。これは失礼かもしれないが、僕にこれだけの事を言った男が挫折するのは見たくない。本当にうまくいって欲しいと思う。

●これからのKIDSはどうなる？

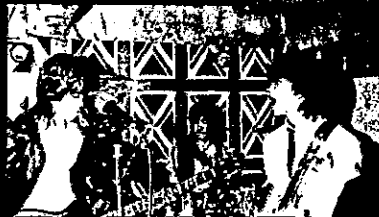
ライブバンドですよ、KIDSは。だからとにかくライブをやりたい。アジアでも何処でも。もちろん、日本中でも。

●福岡の人に言いたい事は？

はっきり言ってゴメン!!だね。2年もブスブスしてて。でも、僕は福岡の人は待っててくれると思うからね。そのうちそれを確かめに行くから。多分来年1月末か2月頭になると思う。とにかく2人の特別なメンバーが見つかったから、今すぐにでも飛んでいきたい。だから待っててくれ。

10月25日/マザー
取材・構成/SCRATCHふじお

HISTORY OF THE KIDS



1980年/ギター、ベース、ドラムスの3ピース・スタイルでKIDS誕生。本格的にライブを始めたのは桐明(vo&g)、千葉(b)、正木(dr)というラインナップになってから。従楽夢、多夢、80'Factoryなどのライブハウスが中心だった。プリティッシュ・ビートに触発されたストレートな曲にモッズと比較したくなるメッセージ性の強い歌詞が特色だったと思う。

1983年/桐明、FM福岡ライブ・エクスプロージョンで一年間ワン・ナイト・キッズのコーナーのDJを勤めたのがきっかけで人気爆発。幾多のメンバー・チェンジを繰り返しながらも、ライブ活動、作曲、テープ制作(自主制作の形で通算4本リリースされた)に励む。(本誌3号、10号にインタビューが掲載。その他10号までのB.N.には何回か小さなライブ・レビューが載っているの、当時の雰囲気を知りたい人はお勧め)



1984年/8月5日、福岡スポーツ・センターで開催されたジャンピン・ジャムに出演(このコンサートは同タイトルでライブ・オムニバス・アルバムとして徳間ジャパンより発売された。もちろんKIDSも一曲参加している。最近CDで再発されてます)。8月26日のライブを最後

に正木が脱退。寺山ヒロミが加入して中期KIDSの黄金期を迎える。

1985年/2月ベースの千葉(現HIGH.18号、25号、27号参照)が脱退。これ以降KIDSはキーボードを導入したり、現ヒートウェイブの山口を初めとするゲストを積極的に呼び、新たな方向性を探る事になる。メジャーからデビューの話も来るが諸々の事情で断念。

1986年/5月4日、大博多ホールでのラストコンサート(詳細13号)も500人のファンを集め大成功のうちに終了、惜しまれつつKIDS解散、桐明は単身上京する。



1987年/バイトを続けながら、バンドを作っでは解散の日々。12月30日に旧友千葉のブックキングで帰郷、福岡ドブレホールにて5人編成で幻のライブ(詳細23号)。当時既にプロとしてスタジオ等で活躍していたメンバーをバックにジャージーな新曲を披露し、新境地を見せる。この時のベースが栗田だった。結局この形では固まらなかったが、このユニットが現KIDSの母体になったと言えるだろう。1989年/4月現メンバー(桐明考治:Vo&G、栗田博:Ba、西川貴広:Dr)でデモ・テープを録音。5月REHEARSAL Act1としてリリースする。

THE KIDS

REHEARSAL ACT 1